

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第46集

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成21年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

南近藤遺跡（平21地点）

大袋城跡（平21地点）

苗木西遺跡（平21地点）

間堀1遺跡（平21地点）

高根・外和田遺跡（平21地点）

苗木町地内（平21地点）

2009

館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第46集

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成21年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

南近藤遺跡（平21地点）

大袋城跡（平21地点）

苗木西遺跡（平21地点）

間堀1遺跡（平21地点）

高根・外和田遺跡（平21地点）

苗木町地内（平21地点）

2009

館林市教育委員会

例　　言

- 本書は、平成21年度に国宝重要文化財等保存整備事業費補助金、群馬県文化財保存事業費補助金を受けて実施した館林市内遺跡発掘調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき次のとおりである。地点名は、平成21年度の調査であることから、「平成21年度地点」とする。なお、南近藤遺跡については、記録保存のための本調査。大袋城跡、苗木西遺跡、間堀1遺跡、高根・外和田遺跡については確認調査。苗木町地内については、試掘調査である。
南近藤遺跡　大袋城跡　苗木西遺跡　間堀1遺跡　高根・外和田遺跡　苗木町地内
- 調査組織は次のとおりである。

調査主体者	館林市教育委員会
担当課	文化振興課文化係
調査組織	教育長　　橋本　文夫 教育次長　齊藤　良雄 文化振興課長　横山　信行 文化財係長　岡屋　英治 主査　荒川　博一 主任　福田　美枝 主事（学芸員）　吉村　昭和 主事補　堀越　峰之 主事補　須藤　美樹
- 調査作業員
浅海莉絵　川内修一　小林和男　阪口丈夫　田村芳之　富山正三　橋本二三夫　原田和沙
久田　進　宮田圭祐
- 出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。
- 本書の編集・執筆については、堀越、荒川が中心となり行った。
- 遺物の実測、遺物観察表及びその他の図版の作成は、浅海、原田、宮田、堀越が行った。
- 調査の実施および本書刊行にあたり、下記の諸氏諸機関のご協力を頂いた。ここに記して感謝申しあげる次第である。（順不同、敬省略）

館林市都市建設部道路河川課	館林市都市建設部都市計画課	館林市農業委員会
館林市史編さんセンター	館林市立第四中学校	社団福祉法人館邑会
深沢敦仁　小林　正　市橋一郎　川島正一	地権者各位	

凡　　例

- 本書における挿図の縮尺は、図中に記した。
- 遺跡位置図は、館林市都市計画図（S = 1/10000）を 1/5000 に拡大し用いた。なお遺跡位置図中のスクリーンショットは遺跡地、■は調査地を示している。
- トレンチ図は、館林市道路台帳（S = 1/1000）を用いた。
- 土層断面及び出土遺物の注記に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帖」に従った。

参考文献

本書を作成するにあたり以下の文献を参考にした。

- 館林市教育委員会『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集～第45集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬の遺跡2 繩文時代』2005年
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬の遺跡5 古墳時代II【集落】』2005年
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬の遺跡6 古代』2004年

目 次

例 言	1
凡 例	1
参考文献	1
目 次	2
挿図目次	2
表目次	2
写真図版目次	3
第1章 館林市の環境	4
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	4
第2章 本調査の概要	6
1. 南近藤遺跡	6
第3章 確認調査の概要	9
1. 大袋城跡	9
2. 苗木西遺跡	10
3. 間堀1遺跡	12
4. 高根・外和田遺跡	15
第4章 試掘調査の概要	16
1. 苗木町地内	16
写真図版	17
報告書抄録	23

挿 図 目 次

第1図 館林市の位置	4
第2図 館林市の地形概念図	5
第3図 平成21年度調査遺跡の位置	5
第4図 南近藤遺跡	6
第5図 トレンチ配置図	6
第6図 1号住居	7
第7図 出土遺物実測図	8
第8図 大袋城跡	9
第9図 トレンチ配置図	9
第10図 苗木西遺跡	10
第11図 トレンチ配置図	10
第12図 1号住居	11
第13図 出土遺物実測図	11
第14図 間堀1遺跡	12
第15図 トレンチ配置図	13
第16図 出土遺物実測図	14
第17図 高根・外和田遺跡	15
第18図 トレンチ配置図	15
第19図 苗木町地内	16
第20図 トレンチ配置図	16

表 目 次

表1 南近藤遺跡遺物観察表	8
表2 苗木西遺跡遺物観察表	11
表3 間堀1遺跡遺物観察表	14

写真図版

南近藤遺跡		17
1-1 南近藤遺跡	調査地	
1-2	1号住居遺構確認	
1-3	1号住居遺物出土状態	
1-4	1号住居全景（南より）	
1-5	1号住居炉	
1-6	1号住居出土遺物 №1 №2	
1-7	1号住居出土遺物 №3 №4	
1-8	1号住居出土遺物 №5 №6	
大袋城跡		18
2-1 大袋城跡	調査地	
2-2	調査風景	
2-3	1T（南より）	
2-4	2T（南より）	
2-5	3T（南より）	
苗木西遺跡		18
3-1 苗木西遺跡	調査地	
3-2	重機掘削	
3-3	1T（東より）	
3-4	2T（東より）	
3-5	1号住居（南より）	
3-6	1号住居出土遺物 №1 №2	
間堀1遺跡		19
4-1 間堀1遺跡	調査地	
4-2	重機掘削	
4-3	1号住居遺構確認	
4-4	2号住居遺構確認	
4-5	3号住居遺構確認	
4-6	4、5号住居遺構確認	
4-7	1T遺物集中箇所（北側）	
4-8	1T遺物集中箇所（南側）	
4-9	7T遺物集中箇所	
4-10	8T遺物集中箇所	
4-11	9T遺物集中箇所	
4-12	出土遺物	
4-13	出土遺物	
4-14	出土遺物	
高根・外和田遺跡		21
5-1 高根・外和田遺跡	調査地	
5-2	調査風景	
5-3	1号溝（東より）	
苗木町地内		22
6-1 苗木町地内	調査地	
6-2	調査風景	
6-3	1T（北より）	
6-4	2T（北より）	
6-5	3T（北より）	
6-6	4T（北より）	
6-7	5T（北より）	

第1章 館林市の環境

1. 地理的環境



第1図 館林市の位置

平坦であるといえる。本市の地形を概観すると、「低台地」と「低地帯」に分けることができる。市域中央部に「低台地」が東西に延びるように所在し、その周辺に「低地帯」が広がる。

この「低台地」は、「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地であり、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古瀬から本市高根に至る台地の北側に沿って、日本最古の砂丘の一つである内陸河畔砂丘が走っており、本市最高標高点はこの上にある。

「低地帯」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された沖積低地である。台地北側の低地帯には、旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は、沖積低地から延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川及び城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地を開析する谷には、他にも茂林寺沼、蛇沼、近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市景観の特徴のひとつになっている。

2. 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は、145箇所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』(市内遺跡詳細分布調査報告書)には、そのうちの144箇所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡3遺跡、縄文時代の遺跡13遺跡(縄文土器のみ採取できた遺跡)、弥生時代の遺跡は0(弥生時代の遺物を採取できた遺跡2遺跡)、古墳時代～平安時代の遺跡(土器類の出土した遺跡)96遺跡(うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は23遺跡)、古墳は17遺跡(古墳総数25基)、中世生産址1遺跡、中世城館址12遺跡、近世城館址2遺跡である。(ただし、複合した時代の遺物散布地が見られるため、その中心になると考えられる時代でまとめたものである。)

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっていることが観察される。館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりを概略してみると、次のようになる。

〈旧石器時代〉

この時代の遺跡は、市内の標高の高い地域に集中する傾向を見せる。邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元で呼ばれる内陸河畔砂丘(自然堤防)上に、その多くが確認されている。

〈縄文時代〉

この時代になると、遺跡数が増えるとともに洪積台地上に営まれるようになる。前期や中期の遺跡は、池沼や谷地を臨む舌状台地上の平坦面に確認されることが多い。後期以降は遺跡数は減少し、その所在は、台地の斜面から微高地に移る傾向がある。後・晚期の包含層等は低地(沖積地)に及ぶ。

〈弥生時代〉

弥生時代の遺跡として確認されたものはないが、微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されている。

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約8万人の都市である。市域は東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に長く、総面積は約60km²である。北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町に、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町に接する。明和町の南には利根川が東流し、群馬県一埼玉県の県境となっている。県庁所在地の前橋市までは約50km、東京(台東区浅草)へは約65kmの距離にあり、首都圏との結びつきも強い。群馬県東南部は「邑楽・館林」地域と呼ばれ、群馬県の中では低地に位置している。館林市の標高は、15m台(大島町東部)から33m台(高根町)であり、おおむね

〈古墳時代〉

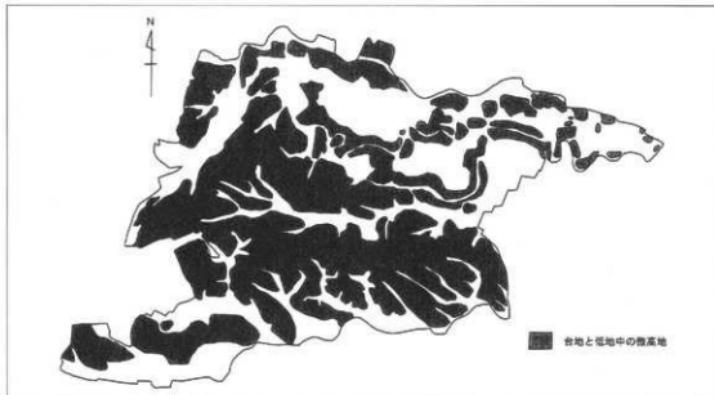
前期の遺跡は少ない。遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在するが多く、この傾向は、弥生時代の遺物散布に似ている。中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、台地上の平坦面へと移行する。後期には、遺跡数は増大し、台地上の平坦部に所在する場合が多い。墳墓としての古墳は、25基が残存している。古墳群が2箇所あり、一つは日向地区を中心とする丘陵・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする内陸河畔砂丘上にある。その他単独のものも多いが、そのいずれもが谷や谷地等をみるとおろす洪積台地上に所在している。

〈奈良・平安時代〉

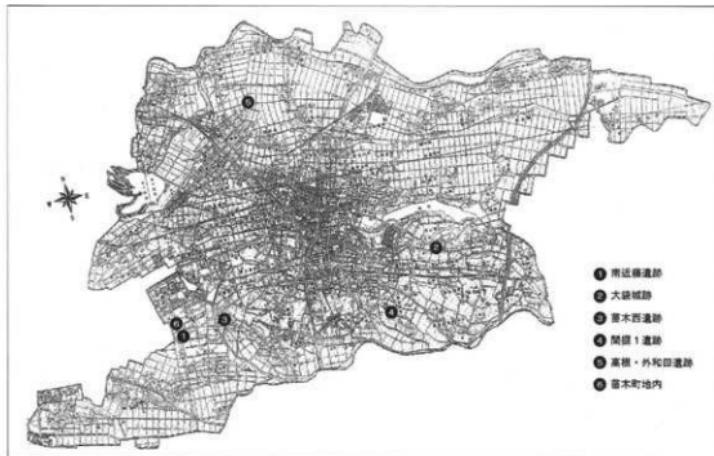
この時代の遺跡は急増する。台地の内部や全面で遺物の採取ができるところから、この時代以降は台地上に普遍的に集落等が営まれてきたことを示唆している。

〈中世・近世〉

この時代の城館址については、伝説的な要素が多く実体ははっきりしないが、中世末には館林城が築かれ、近世には館林城を中心として城下町が形成された。



第2図 館林市の地形概念図



第3図 平成21年度調査遺跡の位置

第2章 本調査の概要

1. 南近藤遺跡



第4図 南近藤遺跡（1:5000）

所 在 地 館林市苗木町2599-84、
2599-110、2599-111

調査原因 個人住宅建設工事

確認調査期間

平成21年4月22日～4月28日

調査面積 77.5m²

本調査期間

平成21年4月30日～5月21日

本調査面積 25m²

遺跡周辺の環境

南近藤遺跡は、館林市南西部、東武鉄道小泉線成島駅の南西約2.5kmに位置する。地形的には、邑楽・館林台地の南縁あたり、近藤沼を形成する開析谷北岸の大体の西部に立地している。西側と南

側には近藤沼からの低地が広がる。遺跡付近の標高は約20mで、低地との標高差は約3mである。

本遺跡の周辺には、近藤沼周辺の台地上に、近藤障子遺跡（绳文・古墳時代）、伝右エ門遺跡（平安時代）、苗木遺跡（古墳・平安時代）、北近藤第一地点遺跡（绳文・古墳・平安時代）、北近藤第二地点遺跡（古墳時代）等が分布する。

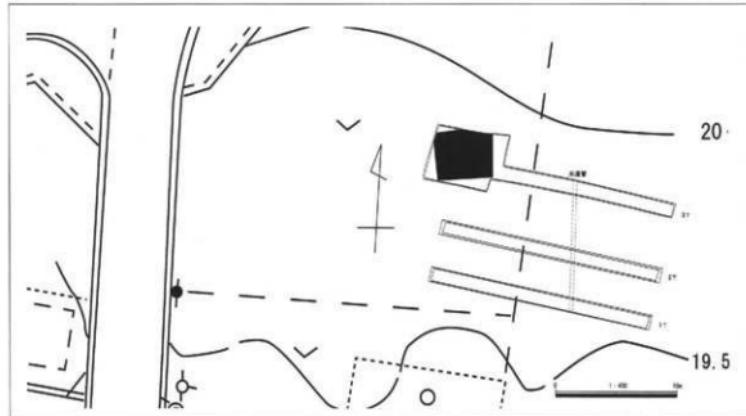
本遺跡は過去に4回調査が行われておらず（昭和62、63年度、平成4、8、16年度）いずれの調査においても古墳時代の住居が数多く確認されている。

今回の調査地は、遺跡の南側にあたる。

確認調査の概要

南近藤遺跡（平21地点）の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、東西方向に3本のトレントを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

現地表面からローム層までの深度は各トレントで約40cm～50cmであった。



第5図 トレント配置図（1:400）

地権者の話によると過去に土木重機により土地の削平が行われたということであったが、トレンチの床面を精査した結果、1トレンチの東端で古墳時代の住居を1軒確認した。

古墳時代の住居1軒を検出したことを踏まえ、改めて代理人と協議を行った。協議の結果、工事計画により遺構が破壊される恐れがあるため、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

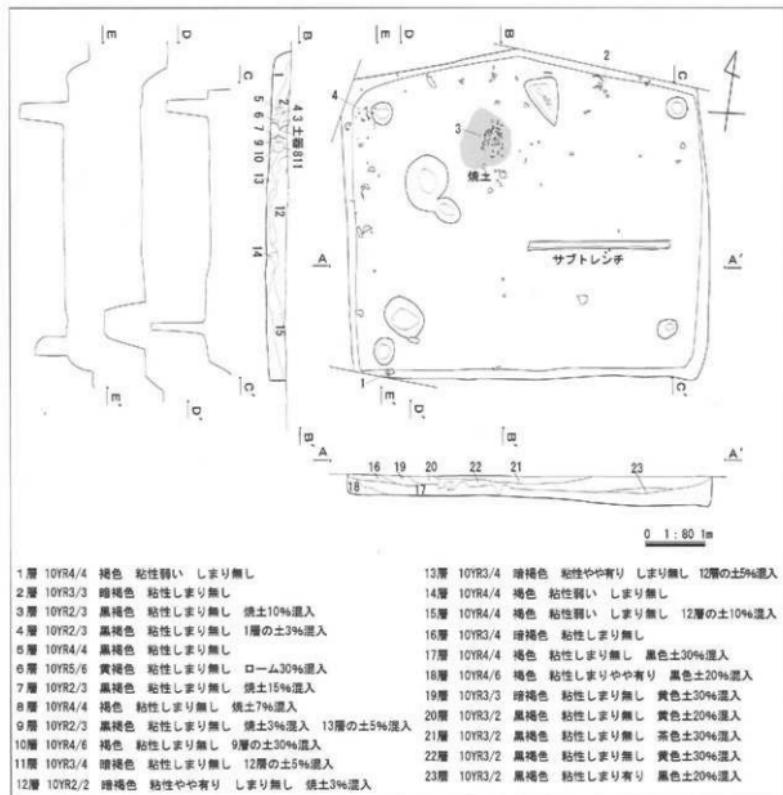
本調査の概要

南近藤遺跡の調査は、確認調査時に住居が確認されたトレンチを拡幅した25m²に限って行った。調査区域を土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げた。その結果、古墳時代中期の炉を持つ住居を1軒確認した。

検出した遺構・遺物

【1号住居】

形状は短軸4m、長軸4.5mで、長軸を東西にもつ隅丸方形である。床面はローム層を10cm掘り込んで床面とし床面は全体的に平坦でよく整う。柱穴は住居のほぼ対角線上に4個確認。直径約30cm、深さ約40~70cm。住居のほぼ中央北寄りで焼土を検出したことからこの場所に炉が設置されたと考えられる。周溝はない。貯蔵穴らしき土坑を検出したが、断定はできない。遺物は、土器部の坩、高坏、臺が出土した。方位はN-10°W。年代は5C前半、古墳時代中期の前半と推測される。



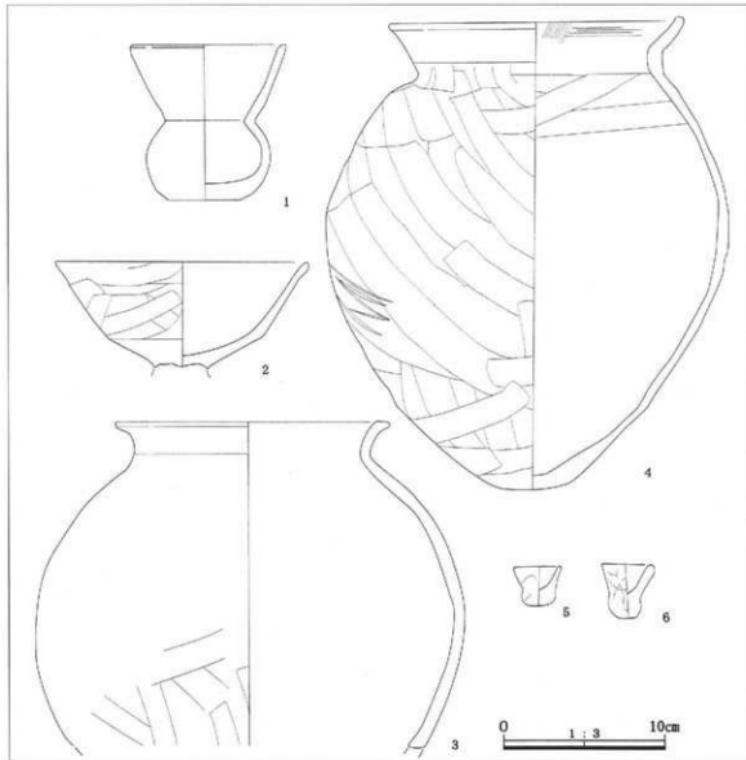
第6図 1号住居 (1:80)

出土した遺物

住居から土器類を中心に多くの遺物が出土した。そのほとんどが古墳時代中期の前半に比定される。中には、北陸系や東海系に比定される遺物もある。

表1 南近藤遺跡遺物観察表

No	器種	口・底・高 (cm)・残存	①焼成②色調③胎土	成・整形技法の特徴	出土位置	備考
1	土 膜 器 壇	9.8・4.5・9.5・ ほぼ完形	①良好②明黄褐色③角閃石 小量	外面 口縁部横ナギ、体部横ナギ。 内面 口縁部横ナギ。	床直	
2	土 膜 器 壺	15.7・—・—・ 1/2	①良好②暗黄褐色③角閃石 茶褐色粒	外面 口縁部横ナギ、颈部鋸削り。 内面 口縁部横ナギ。	床直	
3	土 膜 器 壺	16.8・—・—・ 1/3	①良好②明黄褐色③角閃石 白色粒	外面 口縁部横ナギ、腹部鋸削り。 内面 口縁部横ナギ、腹部横ナギ。	好	東海系
4	土 膜 器 壺	18.4・5.0・28.5・ ほぼ完形	①良好②暗黄褐色③角閃石 白色粒	外面 口縁部横ナギ、腹部刷毛目、腹部鋸削り。 内面 口縁部横ナギ、腹部刷毛目、底部刷毛目。	覆土	北陸系
5	土 膜 器 ミニチュア	3.2・2.7・2.5・ ほぼ完形	①良好②浅黃褐色③白色粒	外面 手づくね。 内面 手づくね。	覆土	
6	土 膜 器 ミニチュア	3.5・2.2・3.2・ ほぼ完形	①良好②明黄褐色③白色粒	外面 手づくね。 内面 手づくね。	覆土	



第7図 出土遺物実測図 (1 : 3)

第3章 確認調査の概要

1. 大袋城跡



第8図 大袋城跡 (1:5000)

所在地

館林市花山町字大袋2299-1

調査原因 店舗建設工事

調査期間 平成21年6月11日～6月25日

調査面積 41m²

遺跡周辺の環境

大袋城跡は、館林市東部に位置し、県道板倉・鶴谷線と県道つづじが岡線の交差点の東方約600mに位置している。

城沼とその南の古城沼の二つの低湿地を核とした周辺台地上に分布する遺跡の一つである。古城沼にはその中央部へ向かって南西から半島状に突き出す洪積台地があり、南西側を除いた三方を古城沼及びこれに伴う低湿地に囲まれたこの台

地とその付け根付近には、以前より中世城館の大袋城が推定されている。

現在台地上は宅地化された部分が多く、城館としての面影を留めていると思われる部分は限られている。

本遺跡の周辺には、縄文時代から中世に至る遺跡が点在しており、大袋I遺跡、大袋II遺跡、花山東遺跡、下志柄遺跡（いずれも縄文時代）、大袋4遺跡（縄文・平安時代）、大袋3遺跡、大袋5遺跡（ともに平安時代）、古墳では富士山古墳、下志柄古墳、町谷1号墳、中世城館址の青山屋敷跡などがある。このうち昭和55～56年度に調査された大袋II遺跡では、縄文時代の住居が10軒確認されている。

今回の調査地は、遺跡の南端に位置している。

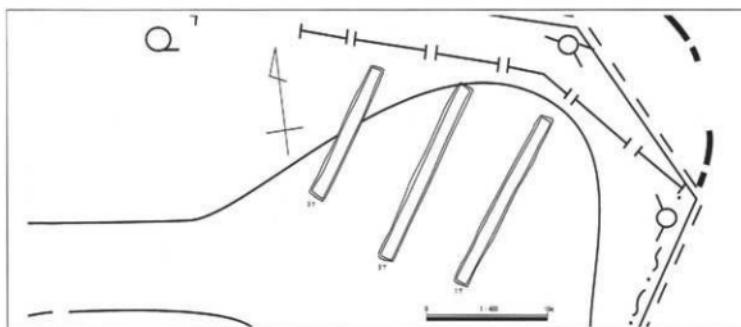
調査の概要

大袋城跡（平21地点）の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南北方向に3本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

調査区域において現地表面からローム面までの深度は各トレンチの南端が一番浅く約40cm、3トレンチの北端では深度180cmを超えてローム面を確認できなかった。地権者の話によると、かつては、調査区域の北に存在する古城沼に向かって南から北へ傾斜していたが、近年盛土を行ったということであった。

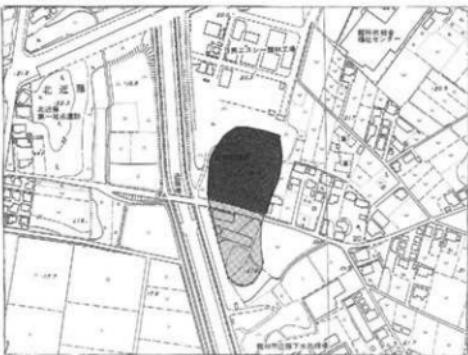
今回の調査で、近代の磁器片が少量出土したが、盛土を行った際に流れ込んだものと思われる。

本調査区域において保存の対象となる遺構等の確認はできなかったことから、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第9図 トレンチ配置図 (1:400)

2. 苗木西遺跡



第10図 苗木西遺跡 (1:5000)

所在地

館林市苗木町2247-71～2247-76

調査原因 工場用地造成

調査期間

平成21年6月11日～6月26日

調査面積 83m²

遺跡周辺の環境

苗木西遺跡は、館林市の南西部、東武鉄道伊勢崎線成島駅の北方約2kmに所在し、平安時代の遺物の散布が見られる遺跡である。

本遺跡は、邑楽・館林台地南部の沖積地の近藤沼の北側の台地上に位置している。この台地は、比較的平坦な広い台地

で、南は近藤沼を臨み、西側に近藤沼から北に延びる深い谷があり、北側には近藤沼から延びる浅い谷によって区切られている。

本遺跡の周辺には、近藤川を隔てた西に広がる台地上に古墳時代の集落跡である北近藤第一地点遺跡、南近藤遺跡がある。南には、平安時代の遺物散布地である苗木遺跡や萩原遺跡が存在する。

本遺跡の調査は、今回が初めてである。

調査の概要

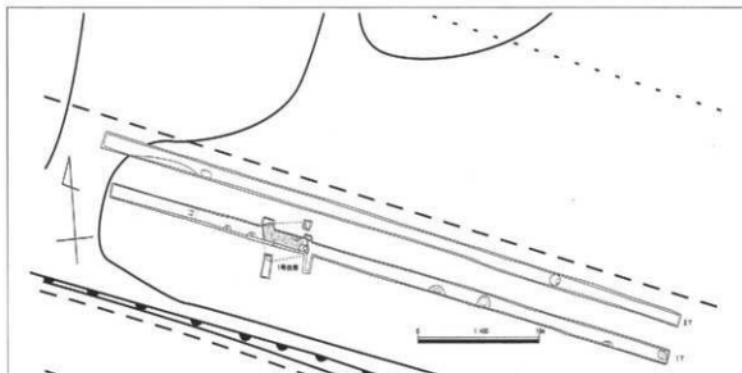
苗木西遺跡(平21地点)の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、東西方向に2本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

現地表面からローム層までの深度は、1、2トレンチを平均すると約30cm～50cmであった。しかし、1トレンチの西端では、約150cm掘り下げてもローム面は確認できなかった。調査地の西には近藤川が南北に流れおり、調査区域は東から西に向かって傾斜している。

トレンチ床面を精査した結果、1トレンチ中央で東西に走る幅約60cmのローム面を切る黒色の掘込を検出した。その性格を明らかにするため掘り下げたところ、奈良～平安時代の住居であることを確認した。

遺物としては、土師器片や酸化炎焼成の須恵器片が出土した。そのほとんどが、住居からの出土である。

今回の調査において、保存の対象となる遺構を確認したことから、調査区域における開発行為に対して開発者と協議を行った結果現地保存の措置が図られることとなった。

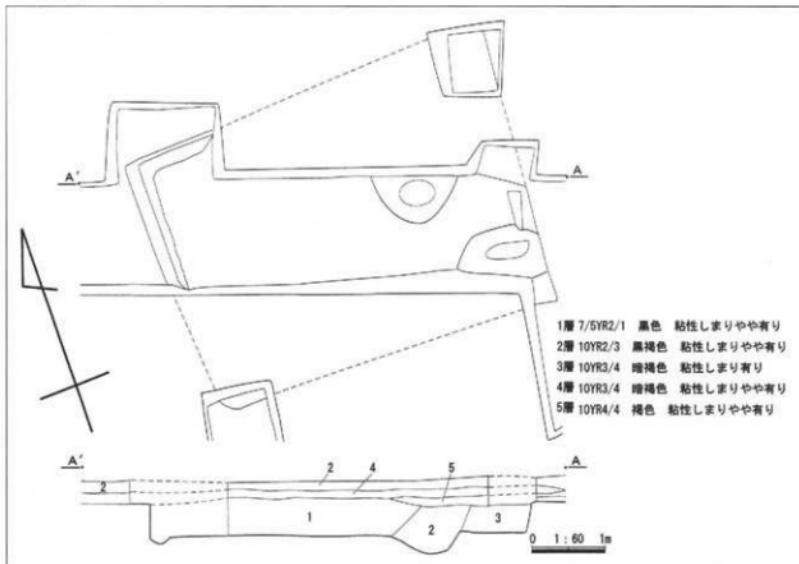


第11図 トレンチ配置図 (1:400)

検出した遺構

【1号住居】

形状は短軸3.6m、長軸4.8mで、長軸を東西にもつ長方形である。床面はローム層を約40cm掘り込んで床面とし床面は全体的に平坦でよく整う。柱穴や竈は調査範囲では検出できなかった。周溝は東壁と西壁に確認できた。一部搅乱を受けている。遺物は、繩文土器片、土師器片、酸化炎焼成須恵器片が出土した。年代は、平安時代と推測される。



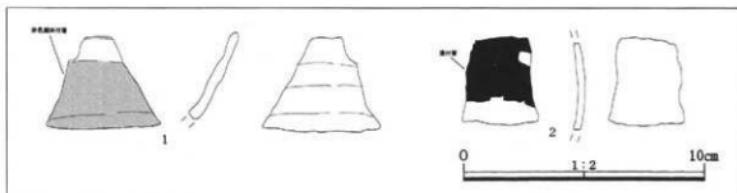
第12図 1号住居 (1:60)

出土した遺物

出土した遺物の中で特筆すべきものとして赤色顔料が付着した酸化炎焼成の須恵器片と漆が付着した土師器があげられる。

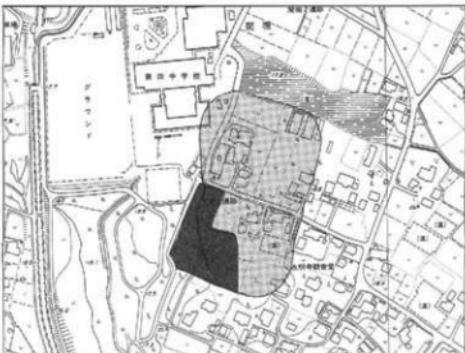
表2 苗木西遺跡遺物観察表

No.	器種	口・底・高 (cm)・残存	①焼成②色調③釉土	成・整形技法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器 片	—・—・—	①酸化炎②暗灰黄③白色釉	ロクロ整形。	1号住居覆土	赤色顔料付着
2	土師器 片	—・—・—	①良好②赤褐色③金雲母	外面 施削り。 内面 ナデか。	1号住居覆土	漆付着



第13図 出土遺物実測図 (1:2)

3. 間堀1遺跡



第14図 間堀1遺跡 (1:5000)

所 在 地

館林市上赤生田町字上ノ前3465-1、

3466-1、3466-7

調査原因

宅地造成

調査期間

平成21年7月30日～9月18日

調査面積

568.25m²

遺跡周辺の環境

間堀1遺跡は、館林市街地の南東部、館林市立第四中学校の東側に隣接する、縄文時代の集落跡を包含する遺跡である。本遺跡は、邑楽・館林台地南辺は東流する谷田川の細長い支谷が複雑に入り組んでおり、後に蛇沼を形成する北西に延びた谷とその北側の谷との合流点にあ

る舌状台地上に所在する。

周辺の遺跡としては、北側に延びる谷の対岸に縄文・平安時代の間堀2遺跡、蛇沼を挟んだ対岸に縄文・奈良～平安時代の神明前遺跡、同じ舌状台地の南東方向には縄文・古墳・平安時代の上ノ前遺跡と谷向遺跡が広がっている。

遺跡周辺は中学校が建設された以外は大きな開発はされておらず、多くの田畠に囲まれた閑静な住宅地となっている。西側に広がる蛇沼湿原にはオニバスなどの貴重な植物が今でも残る。

本遺跡の調査は数回行われている。昭和57年度に遺跡北西端部分で行われた調査では、縄文時代前期の住居1軒、縄文時代中期の住居6軒、土坑2基などが見つかっている。平成19年度に行われた確認調査では、縄文時代の住居が3軒。それに続く平成20年度に行われた本調査では、前年度に確認された住居1軒を含む縄文時代中期の住居4軒、集石土坑1基、遺物集中箇所1基、土坑1基等が確認され、それに伴う縄文時代中期の土器・石器の多量出土が見られた。

調査の概要

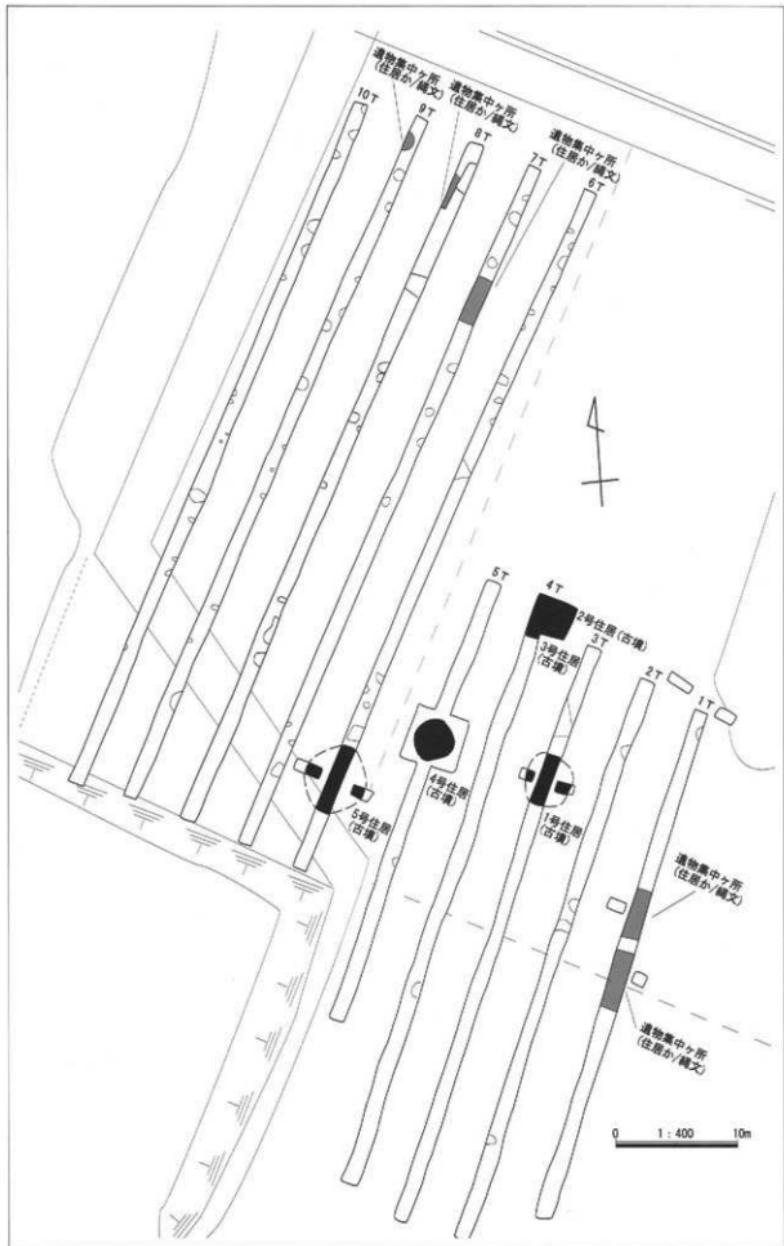
間堀1遺跡(平21地点)の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南北方向に10本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行い一つ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

調査区域においては、現地表面からローム層までの深度は調査区の北側では、約60～90cm。中央では約30cm。南側では、約100cm掘り下げてもローム層が確認できない場所があった。調査区域の地形としては、北と南が谷になっており、その谷に挟まれた中央部は周囲よりも高い場所となっている。

今回の調査では、縄文土器片が集中して出土する箇所やローム面を切る黒色土を確認した。その他、多くの土坑を確認したが調査以前はツヅジが植樹されており、その多くはツヅジの根によるものだらうと推測される。縄文土器片が大量に出土した箇所は、調査区域で5箇所確認し、遺物の出土範囲を確認するためにそれぞれにサブトレンチを設定し、範囲を確認した。過去の調査結果等を考慮すると縄文時代の住居である可能性が高い。出土した遺物については、縄文時代前期から縄文時代中期に比定される。前期の土器については黒浜式に比定されるもの。中期の土器については、勝坂式、阿玉台式、加曾利E2式、加曾利E4式に比定されるものが出土している。

ローム面を切る黒色土は調査区域で5箇所確認した。その広がりを確認するためにサブトレンチを設定し掘削を行った結果、古墳時代前期の後半の土器片が出土したことから、他の4箇所の黒色土部分も同じ性質を持つことから、同じく古墳時代の住居と考えられる。

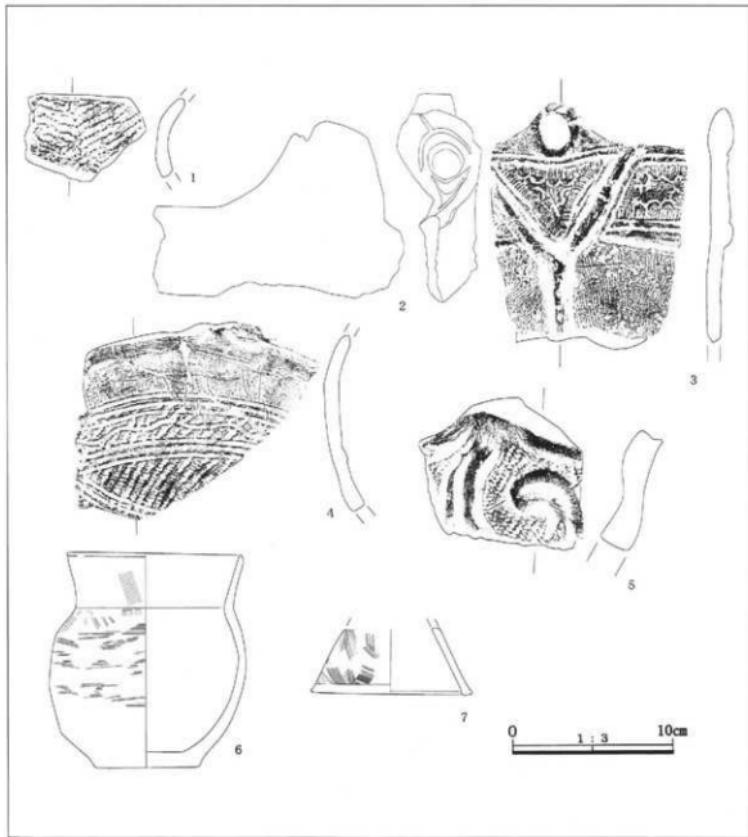
今回の調査において、縄文時代前期から中期の住居と推定される箇所が5箇所。及び古墳時代前期の後半の住居が5軒確認されたことから、現地保存あるいは記録保存のための発掘調査も視野に入れて開発者側と協議していくたい。



第15図 トレンチ配置図 (1 : 400)

表3 間堀1遺跡遺物観察表

No	器種	口・底・高 (cm)・残存	①焼成②色調③胎土	成・整形技法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器 深鉢	—・—・—・ 破片	①良好②明黄褐色③白色粒	羽状縄文を施す。	7 T	黒洞式
2	縄文土器 深鉢	—・—・—・ 破片	①良好②浅黄褐色③茶褐色 粒	口縁部に渦巻状の山形突起を付ける。	1 T 遺物集中 箇所	撫坂式
3	縄文土器 深鉢	—・—・—・ 破片	①良好②明黄褐色③金雲母・ 白色粒	籠縞を施しその縁辺を籠状の工具で連續 の押し引き。	7 T 遺物集中 箇所	阿玉台式
4	縄文土器 深鉢	—・—・—・ 破片	①良好②暗赤褐色③角閃石	口縁部は無紋。口縁部下に沈線をめぐらせ 口縁部を区画し、胴部に縄文を施す。	9 T 遺物集中 箇所	加曾利E 2式
5	縄文土器 深鉢	—・—・—・ 破片	①良好②浅黄色③金雲母・ 白色粒	口縁部は無紋。口縁部下に沈線をめぐらせ 口縁部を区画し、胴部に縄文を施す。	8 T	加曾利E 4式
6	土器 台付 台部分	—・10.2・—・ —	①良好②明黄褐色③青褐色 粒	外面 刷毛目。 内面 不明瞭。	4号住居	
7	土器 肩 帯	5.0・3.3・13.2・ ほぼ完形	①良好②明黄褐色③角閃石 小粒	外面 口縁部不明瞭。窓い刷毛目。 内部 不明瞭。	4号住居	



第16図 出土遺物実測図 (1:3)

4. 高根・外和田遺跡



第17図 高根・外和田遺跡 (1 : 5000)

また、遺跡の東は南側の河畔段丘と隔てる広く深い谷となっており、その谷幅は約250mある。遺跡周辺の標高は、最も高い内陸河畔砂丘上で約26m、テラス状の微高地で約23m。周辺との高低差は約1～5mである。今回の調査地は、遺跡の北側にある。

本遺跡の周辺には、同じ内陸河畔砂丘上に旧石器時代の遺物が出土した山神脇遺跡や縄文時代と古墳時代の小蓋蒼遺跡や梅木山遺跡のほか、現在も5基の古墳が残る高根古墳群などがある。現存はないが、58m級の前方後円墳である天神二子古墳が所在した。また内陸河畔砂丘から南東に連なる洪積台地上には、古墳時代の住居が確認された大道北遺跡、縄文時代から平安時代にかけての岡野・屋敷前・岡遺跡等がある。本遺跡では、これまでの発掘調査で、縄文土器、土師器、須恵器や埴輪が出土している。

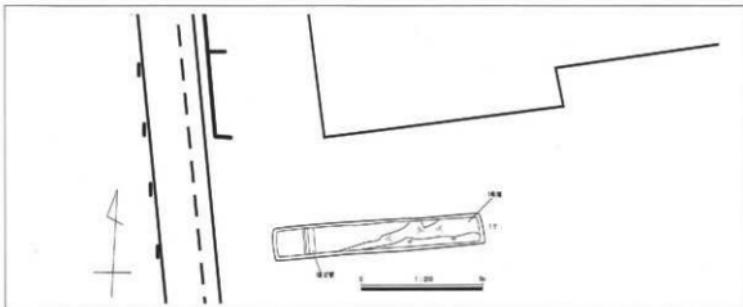
調査の概要

高根・外和田遺跡（平21地点）の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、東西方向に1本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

調査区域において、現地表面からローム層までの深度は約160cmであった。過去に、盛土が行われており表土から深度約140cmまでは、碎石等が混入していた。

今回の調査で検出した遺構は、溝が1条である。出土した遺物は、縄文土器片と土師器片が数点出土した。遺構は、調査区域が狭小な事もありその全体像を把握する事は困難であった。付近に古墳群が存在していることから古墳の周溝とも考えられるが、断定は難しい。

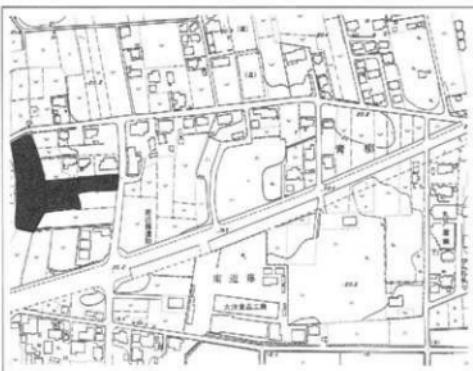
調査結果を踏まえて開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第18図 トレンチ配置図 (1 : 200)

第4章 試掘調査の概要

1. 苗木町地内



第19図 苗木町地内（1:5000）

は約20m、低地との標高差は約3mである。

調査地の周辺には、北近藤第一地点遺跡（縄文・古墳・平安時代）、北近藤第二地点遺跡（古墳時代）南近藤遺跡（古墳時代）等が分布する。これまでの調査で周辺の遺跡からは古墳時代の住居が多数確認されている。

確認調査の概要

苗木町地内（平21地点）の試掘調査は、工事予定区の地形に合わせ、南北方向に5本のトレントを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

現地表面からローム層までの深度は1トレントで約20cm、5トレントでは70cm掘り下げたが湧水が激しく確認できなかった。調査区域は東から西に傾斜している。また1トレント以外では、湧水を確認した。さらに各トレントで植物質を多く含む層を確認したことから湿地であった可能性が高い。

今回の調査では、保存の対象となる遺構等の確認はできなかったことから、調査区域における開発行為に対しての埋蔵文化財への影響はないものと判断した。

所在地

館林市苗木町字南近藤2599-8、2599-14、
2599-25~26

字西ノ谷3163-1、3163-10

調査原因

資材置き場造成

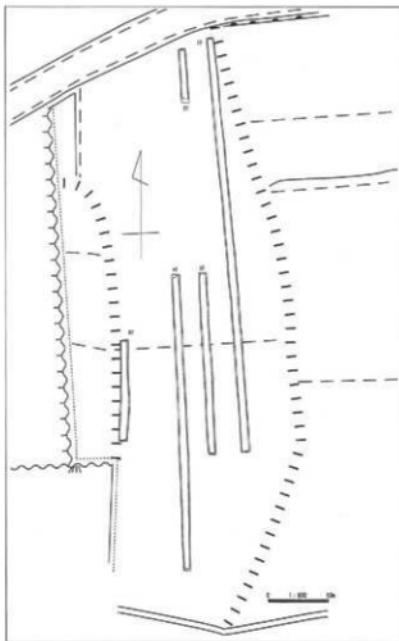
調査期間

平成21年11月5~11月16日

調査面積 170.5m²

調査地周辺の環境

調査地は、館林市南西部、東武鉄道小泉線成島駅の南西約2.5kmに位置する。地形的には、邑楽・館林台地の南縁にあたり、近藤沼を形成する開析谷北岸の台地の西部に立地している。西側と南側には近藤沼からの低地が広がる。台地の標高



第20図 トレント配置図（1:800）

南近藤遺跡

(写真図版 1)



1-1 南近藤遺跡 調査地



1-2 南近藤遺跡 1号住居遺構確認



1-3 南近藤遺跡 1号住居遺物出土状況（南より）



1-4 南近藤遺跡 1号住居全景（南より）



1-5 南近藤遺跡 1号住居炉



1-6 南近藤遺跡 1号住居 出土遺物 №1 №2



1-7 南近藤遺跡 1号住居 出土遺物 №3 №4



1-8 南近藤遺跡 1号住居 出土遺物 №5 №6

大袋城跡



2-1 大袋城跡 調査地



2-2 大袋城跡 調査風景



2-3 大袋城跡 1T (南より)



2-4 大袋城跡 2T (南より)



2-5 大袋城跡 3T (南より)

苗木西遺跡



3-1 苗木西遺跡 調査地



3-2 苗木西遺跡 重機掘削



3-3 苗木西遺跡 1T (東より)



3-4 苗木西遺跡 2T (東より)



3-5 苗木西遺跡 1号住居 (南より)



3-6 苗木西遺跡 1号住居出土遺物 No.1 No.2

間堀1遺跡



4-1 間堀1遺跡 調査地



4-2 間堀1遺跡 重機掘削



4-3 間堀1遺跡 1号住居遺構確認



4-4 間堀1遺跡 2、3号住居遺構確認



4-5 間堀1遺跡 3号住居遺構確認



4-6 間堀1遺跡 5号住居遺構確認



4-7 間堀1遺跡 1T遺物集中箇所(北側)



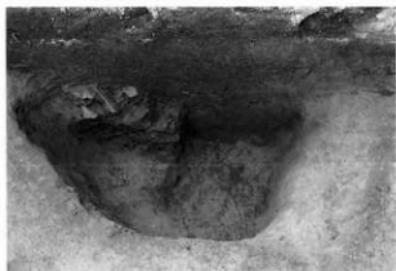
4-8 間堀1遺跡 1T遺物集中箇所(南側)



4-9 間堀1遺跡 7T遺物集中箇所



4-10 間堀1遺跡 8T遺物集中箇所



4-11 間堀1遺跡 9 T 遺物集中箇所



4-12 間堀1遺跡 出土遺物 No.1 No.2 No.3



4-13 間堀1遺跡 出土遺物 No.4 No.5



4-14 間堀1遺跡 出土遺物 No.6 No.7

高根・外和田遺跡



5-1 高根・外和田遺跡 調査地



5-2 高根・外和田遺跡 調査風景



5-3 高根・外和田遺跡 1号溝(東より)

苗木町地内



6-1 苗木町地内 調査地



6-2 苗木町地内 調査風景



6-3 苗木町地内 1T (北より)



6-4 苗木町地内 2T (北より)



6-5 苗木町地内 3T (北より)



6-6 苗木町地内 4T (北より)



6-7 苗木町地内 5T (北より)

報告書抄録

ふりがな	たてばやししないいせきはっくつちょうさほうこくしょ								
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書								
副書名	平成21年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査				卷次	_____			
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書				シリーズ番号	第46集			
編集者名	堀越峰之				編集機関	館林市教育委員会			
編集機関所在地	〒374-8501 群馬県館林市城町1番1号								
発行年月日	2010(平成22)年3月31日								
市町村コード	102075								
所取遺跡	所在地	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
南近藤遺跡	苗木町字南近藤	91	361332	139303	20090422～20090428 (確認調査)	77.5m ²	個人住宅		
					20090430～20090521 (本調査)	25m ²			
大袋城跡	花山町字大袋	69	36142	1393345	20090611～20090625 (確認調査)	41m ²	店舗		
苗木西遺跡	苗木町字苗木西	94	361336	1393034	20090611～20090626 (確認調査)	83m ²	工場		
間堀1遺跡	上赤生町字上ノ前	116	361322	1393251	20090730～20090918 (確認調査)	568.25m ²	宅地造成		
高根・外和田遺跡	高根町字外和田	11	361558	1393131	20100120～20100123 (確認調査)	8.5m ²	個人住宅		
苗木町地内	苗木町字南近藤 字西ノ谷	—	361336	1392959	20091105～20091116 (試掘調査)	170.5m ²	資材置き場		
遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物	特記事項			
南近藤遺跡	集落跡	古墳・平安時代	住居1(古墳)		土師器・石器	一部搅乱			
大袋城跡	城館址	中世	なし		近代陶磁器	湧水			
苗木西遺跡	散布地	平安	住居1(平安)		土師器片・須恵器片	一部搅乱			
間堀1遺跡	集落跡	縄文	遺物集中箇所5(住居か/縄文) 住居5(古墳)		縄文土器・土師器・石器	一部搅乱			
高根・外和田遺跡	散布地	縄文・古墳・平安	溝1(古墳周溝か)		縄文土器片・土師器片	盛土			
苗木町地内	—	—	なし		縄文土器片	湧水			

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第46集

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成21年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

編集・発行 館林市教育委員会 文化振興課 文化財係（館林市文化会館内）

〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号 電話0276-74-4111

印 刷 朝日印刷工業株式会社

発行年月日 平成22年3月31日



文化財愛護シンボルマーク

<http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/>